

## ディベート・作文・対話について

無事、1 学期の終業式を迎えることができました。夏季休業に入ります。健康と安全に留意して、8 月 25 日 (金)、元気に登校してください。

さて、今日も、いつもの「一流」「自学力」「港北スピリット」「アクティブ・ラーニング」に関連したお話です。学習指導要領が改訂されます。2017 年度中に告示され、2022 年 4 月から年次進行で実施されます。その柱の一つは、「アクティブ・ラーニング」ですので、新学習指導要領の内容は、2017 年の港北高校と深く関わっています。新学習指導要領は (港北高校は)、「生きる力」を育成します。「生きる力」と「学力」を一体化させますので、「学力」とは呼ばず、「資質・能力 (自学力)」と呼びます。この資質・能力を育成するためには、「主体的・対話的で深い学び」を実現せねばなりません。その実現の視点が、「アクティブ・ラーニング」なのです。

そこで、本日は、布川流「対話的な学び」「深い学び」のお話を読んでもらうことにします。

まずは、「深い学び」に関わって、「競技ディベートの勧め」です。「競技ディベート」は「対話」ではありません。「勝ち負けを決める討論」です。対話によっても、学びは深まりますが、競技ディベートの比ではありません。何しろ、勝たなくてはなりませんから。勝敗を決めるのは、ジャッジです。試合相手と戦う他の競技ならば、勝敗はジャッジに聞かずとも自分でわかります。しかし、競技ディベートは、ジャッジに聞くまで勝敗はわかりません。自分では、「勝った」と思っている、ジャッジを説得できているかどうかはわかりません。つまり、競技ディベートの真の試合相手は、ジャッジだということです。

競技ディベートに勝つために必要な力、それはクリティカル・シンキング (批判的思考) 力です。( ) 内の訳語を勘違いして、相手の意見を全否定してしまうのは、ジャッジを説得することはできません。自分自身もクリティカル・シンキングの対象とし、問い続け、吟味します。およそ、世の中には、全否定されるほど価値のないものはないし、全肯定されるほど完璧なものもありません。それを、全否定・全肯定できてしまうのは、思考が浅いからに他なりません。こうやって、競技ディベートによって、クリティカル・シンキングの力を身につけることで、学びは確実に深まります。

「競技ディベートの勧め」これは、私の実体験に基づいたお話です。実際の私は、競技ディベートをやったことはありません。私が、やったのは本当のディベートです。ジャッジのかわりに多数決をとります。私は、多数決で負けたことがありません。多数決ゲームのお蔭で、随分と鍛えられました。そして、2002 年、多数決ゲームから引退しました。「多数決で勝っても、世の中は変わらない」と思ったからです。「多数決 (Win-Lose) では、Win-Win の合意形成はで

きない」と思ったからです。多数決ゲームで培った力で、課題を発見し、「対話」により、反対論者を説得し、合意を形成しなければ世の中は変わりません。ディベート力は、課題を発見し、解決策を立案するための力としては優れていますが、ディベートという方法では、世の中を変えることはできません。

そこで、「対話的な学び」「対話の勧め」となるわけです。「対話」により、「学び」は「広がり」ます。「深まり」もします。しかし、何よりも、「対話」によって培われる「対話力」、これこそが「世の中を変える」力なのです。ディベートで培った力を以て、ディベートせずに対話する。これこそが、「世の中を変える」方法なのです。

「深い学び」をもう一つ。「書くこと（作文・小論文）の勧め」です。「アクティブ・ラーニング」の視点の一つにアウトプットという重要な視点があります。ディベートもアウトプットです。「丸暗記したことはすぐに忘れる」「理解したことは忘れない」と言われますが、そもそも前者はその後も覚えていたとしても、意味がありません。丸暗記の知識では活用（思考・判断・表現）できないからです。つまり、丸暗記の知識は、世の中を変える力にはならないということです。理解したことは活用（思考・判断・表現）できます。その関係を逆さまにして、力をつけようというのがアウトプット学習法です。「アウトプット（出力・表現）」するためには、「思考・判断」が必要です。「思考・判断」するためには、「知識・理解」が必要です。「知識・理解」が足りなければ、勉強（インプット・入力）します。アウトプットの必要に迫られて、勉強するということです。

そこで、「書くことの勧め」です。「書くこと」と「ディベート」ほど、「思考・判断」、ひいては「知識・理解」を求められることはありません。「書くこと」「ディベート」、要は「論述」です。少ない字数では、力つきません。小論文レベルの字数が必要です。一定程度の字数を与えられたとき、意味の通る文章が書けるか否かは、文章力（表現力）の問題ではありません。わかっているなら書けるし、わかっていないなら書けない。わかっていないなら、書いたとしても、意味の通る文章にはなりません。思考・判断が深まれば、書けるようになります。書きたくなります。書くために思考・判断し、思考・判断することで理解が深まり知識が定着します。思考・判断が深まれば、その思考・判断の深さに見合う表現力が欲しくなります。表現活動によって最後に身につく力が表現力なのです。「知識・理解」のレベルが論述（思考・判断・表現）のレベルにまで引き上げられた結果、論述できた。論述（思考・判断・表現）したことは忘れません。これも、私の体験です。過去に、私が、ディベートで論述したこと、紙の上で論述したことは忘れません。展開した論理を支える知識・理解と共に鮮明に覚えています。

ディベート・作文・小論文で鍛えた思考力・判断力を以て Win-Win の対話を行う。これが、世の中を変える方法であり、どんな道に進もうとも、「一流」と言われるレベルになるということだと、私は思っています。だから、港北高校は、「主体的・対話的で深い学び」を実現しようと、「課題を発見し解決するために必要な『自ら主体的に学び続ける力』」を育てようとしているのです。勉強と生きる力が別物の時代は終わりました。勉強して、勉強して、生きる力を身につけてください。